

実習者名 牟田 龍史（6年生）

実習期間 平成28年4月4日（月）～4月28日（木）

実習施設 中尾クリニック、宝在宅医療クリニック

約一か月間、短いようで長かったこの期間、自分は初めて在宅診療の現場を見てきました。結論から言うと自分はこの実習を選んで本当に良かったと思えましたし、誰よりも良い時間を過ごしたと自負しております。とは言いつつも、実習の初め、本当に不安でした。正直のことを言うと実習に対してもあまり乗る気ではありませんでした。でも、現場を見、様々なことを体験していく中で、医療に対する姿勢、がん患者が昨日までは元気にしていたかと思えば突然この世を去ってしまうこと、患者が家ではどのように暮らしているのか、患者さんを取りまく社会的な背景、食の大切さ、人間の本来持っている回復力など、病院にいただけでは学べないような、またこれから医者になり働くうえで大切なことを気づかせてもらいました。

この一か月の間、たくさんの患者さんに出会いました。落ち込み悩むこともありましたが、ある先生が言っていた「患者さんを通して学ぶことがある」という言葉が少しわかった気がします。今思えばこのような実習ができて本当に良かったです。この実習に携わってくださった先生方、そして実習中に出会った皆様に感謝を届けます。ありがとうございました。



実習者名 濱田 航一郎（6年生）

実習期間 平成28年5月2日（月）～5月27日（金）

実習施設 中尾クリニック、宝在宅医療クリニック

1ヶ月間在宅診療の実習を通して、病院では経験できないようなことを経験することができ、様々なことを考えることができた。

1年間、臨床実習で大学病院の各診療科をまわり、今回の高次臨床実習で在宅診療をみることで新たな視点や発見をすることができた。同じ患者さんを何度か診ることができ、経過をたどることができたこと、また、2つの診療所で実習することでその違いを見られたことはよかった。

患者さんと接し診療していくうえで、医療面だけではなく、社会的な面も考えていく必要があると実感させられた。家族との関係やどういう場所に住んでいるのか知っておくことで、より患者さんに沿った医療ができるのではないかと思う。

さらに、疾患のこと、それを治していくということだけでなく患者さんにとって何が最適なことなのかを考えてみる、という新しい視点を身に付けることができた。中心静脈栄養で何年も生活されている方をみて、その方にとって中心静脈栄養は生きる上で欠かせないものであると知った。

また、多職種とうまく連携し、情報共有や協力が必要だと感じた。患者さんの周りには訪問看護師やヘルパーなどの多くの職種、医療従事者が関わっており、うまくそれらを活用すればよりよい生活が送れることに繋がると思う。

今回の実習を通して、患者さんと医師に信頼関係が構築されているのを目にして、どうやったら信頼関係を持つことができるのか、良好なコミュニケーションの取り方はどうすればよいかを考えた。今回経験できたことを生かして、今後の実習、さらに研修医として働き始めてからも頑張りたい。



実習者名 高橋 良子（6年生）

実習期間 平成28年5月30日（月）～6月24日（金）

実習施設 中尾クリニック、谷川放射線科・胃腸科医院、

在宅医療実習は、とても有意義な実習でした。

以前受けた医と社会の授業などでは、患者さんの背景を知ることが大切だということを知り、確かに感想文などでも「患者さんの家族関係や患者さんの望みを知るのはとても重要だ」と書きました。

しかし、在宅医療実習を通して、病院実習ではそれを実践しているつもりでも実は何も出来ていなかったのだということを痛感しました。

在宅医療実習で、在宅医療とは究極のオーダーメイド医療だと知りました。五感を総動員して患者さんの背景を知り、患者さんの希望に合わせて治療を行っていくことは、高齢社会において今後求められていく医療の形だと思いました。

患者さんには高齢者が多く、昨日元気だった方が次の日に亡くなるといったこともありました。患者さんと触れ合う毎日がかげがえのない日となり、患者さんとたくさん笑い、たくさん泣いた実習でした。

今後、私がどのような病院に勤め、何科の医師になったとしても、この実習でたくさん考え悩んだことは活かされ私の宝になると思っています。





実習者名 竹内 弘之（6年生）

実習期間 平成28年5月30日（月）～6月24日（金）

実習施設 谷川放射線科・胃腸科医院、中尾クリニック

一ヶ月の在宅実習を終え、ひとまわり以上成長したと思います。大学の講義で様々な疾患や病態について学んできました。臨床実習では、病棟で患者さんを目の前に実習をしてきました。しかし、実際は医療は病院で終わりではなく、家庭に帰ってからも必要であり、その家庭環境によっては十分なケアができるかどうかも違ってきます。

家庭環境は、非常に様々です。車椅子移動の人や寝たきりの人も自分の行動範囲に工夫を凝らしているようなものが置いてありました。また、家族関係も様々です。介護をする人も様々な苦労があるようで、往診の時に先生と患者本人がいないところで少し話をして自分の気持ちの整理をしていました。お茶をご馳走になりながら家族の方と話をする機会もありました。こういう時間は患者本人だけでなく、その周りの人を気遣う意味でも大切なことだとおもいました。何回も往診していると、患者さんだけでなく家族の方とも面識ができ、どんどん距離が近くなり話も弾むようになりました。高血圧の方の家庭血圧を記録した手帳の意義も学びました。確かに血圧の変化を見るのは大切ですが、前回の往診の時から血圧をみて体調が悪かったであろう日を見つけどうだったのかを確認することもできるのです。また、毎日つける作業ができないことが認知症の発見にもつながるということも知りました。がんの末期でもう危ない人もいました。いま、これを書いている間もどうなったのだろうかと気になります。

デイサービス・デイケア・特別養護老人ホームなど様々な施設にも伺いました。施設毎に提供するものも違うので、患者さんの状態・性格に合わせてふさわしいサービスや生活環境が選ばれていれば、満足度の高いものになるだろうと、先生と話していました。

この実習で先生方の往診に付き添い間近で何を行い何を考えているかを教えてもらいながら見学できたことは本当にありがたい経験でした。この機会に学んだことを今後の人生に生かせるよう努力していきたいと思います。本当にありがとうございました。

